

平成26年度

第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成27年2月24日（火）

平成26年度 第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成27年2月24日（火）午後2時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 平成27年度入学試験の状況について

[2] 平成26年度進路状況について

[3] 富山高等専門学校 平成26年度 年度計画実施状況について

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 教育に関する事項

(1) 入学者の確保 P 1 *

(2) 教育課程の編成等 P 3

(3) 優れた教員の確保 P 5

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム P 7

(5) 学生支援・生活支援等 P 9

(6) 教育環境の整備・活用 P 12

2. 研究や社会連携に関する事項 P 13

3. 国際交流等に関する事項 P 15

4. 管理運営に関する事項 P 17

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置 P 20

III 予算（人件費の見積もりを含む，収支計画及び資金計画） P 20

[4] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略、順序不同〕

遠 藤 俊 郎（富山大学長）
松 本 三千人（富山県立大学工学部長）
藤 堂 利 一（富山高等専門学校技術振興会会長）
及 川 武 司（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）
犬 島 伸一郎（株式会社北陸銀行特別参与）
金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）
正 橋 哲 治（立山科学工業株式会社総務部人事グループグループマネージャー）
石 山 彰 雄（富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長）
<代 理>
佐 野 友 昭（富山県教育委員会県立学校課 高校教育係 主幹 係長）
（坪 池 宏 富山県教育委員会県立学校課課長の代理）
富 樫 良 一（富山県中学校長会副会長）
（吉 江 友 秋 富山県中学校長会会長の代理）

【欠席委員】

黒 田 輝 夫（富山県中小企業団体中央会会長）
梅 田 ひろ美（株式会社ユニゾーン代表取締役会長）

【富山高等専門学校出席者】

石 原 外 美（校長）
西 田 均（副校長）
成 瀬 喜 則（副校長）
西 敏 行（教務主事）（本郷）
青 山 晶 子（学生主事）（本郷）
水 谷 淳之介（学生主事）（射水）
高 熊 哲 也（寮務主事）（本郷）
水 本 巖（寮務主事）（射水）
遠 藤 真（専攻科長）
林 興 一（事務部長）

小 林 正 幸（総務課長）
竹 山 富士男（管理課長）
松 梨 英 輔（学務課長）
山 田 豊（学生課長）
船 崎 浩 之（総務課課長補佐）
柴 田 淳（総務課課長補佐）
穴 田 さおり（総務課課長補佐）
新 井 浩（学生課課長補佐）
清 水 由美子（総務課主査）
錦 織 掌（総務課主査）

〔開会 午後 2時00分〕

1. 開会挨拶

【林事務部長】 本日はお忙しい中、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。

ただいまから、平成26年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を開催いたします。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます事務部長の林です。どうかよろしくをお願いいたします。

初めに、開会に当たりまして、本校の石原校長からご挨拶を申し上げます。

【石原校長】 皆様、こんにちは。

ご多用な中、本会議にご出席いただきましてまことにありがとうございます。

昨年の7月に1回目の運営諮問会議を開催させていただきました。今回、入学試験の結果や、本校の卒業生がどういったところに就職したかというデータも出てまいりましたので、今日は2回目の運営諮問会議を開催させていただきます。

貴重なご意見をお聞かせいただけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 出席者紹介

【林事務部長】 それでは、本日ご出席いただいております委員の皆様方をご紹介させていただきます。

富山大学長 遠藤俊郎様。

【遠藤委員】 よろしく申し上げます。

【林事務部長】 富山県立大学工学部長 松本三千人様。

【松本委員】 松本です。よろしく申し上げます。

【林事務部長】 富山県教育委員会県立学校課長 坪池 宏様の代理で、県立学校課 高校教育係 主幹 係長 佐野友昭様。

【佐野委員】 佐野です。よろしく申し上げます。

【林事務部長】 富山県中学校長会会長 吉江友秋様の代理で、富山県中学校長会副会長

富樫良一様。

【富樫委員】 よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 富山高等専門学校技術振興会会長 藤堂利一様。

【藤堂委員】 藤堂です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事 及川武司様。

【及川委員】 及川です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 株式会社北陸銀行特別参与 犬島伸一郎様。

【犬島委員】 犬島です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様。

【金岡委員】 金岡です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 立山科学工業株式会社総務部人事グループグループマネージャー 正橋哲治様。

【正橋委員】 正橋です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長 石山彰雄様。

【石山委員】 石山です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 なお、本日、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、株式会社ユニゾーン代表取締役会長 梅田ひろ美様は、ご都合によりご欠席です。

続きまして、同席させていただきます本校の関係者を紹介させていただきます。

校長の石原です。

副校長の西田教授です。

同じく副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の西教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の青山教授です。

同じく学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の高熊教授です。

同じく寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

専攻科長の遠藤教授です。

総務課長の小林です。

管理課長の竹山です。

学務課長の松梨です。

学生課長の山田です。

その他、事務職員が同席させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

引き続きまして、席上に配付しております資料の確認をさせていただきます。

(資料確認——記事省略)

【林事務部長】 本日の運営諮問会議は16時ごろまでの予定でご協議いただくこととなっております。

議長ですが、ご選出いただいております富山大学長の遠藤先生にお願いしたいと思えます。

遠藤先生、よろしくお願いいたします。

(遠藤議長 議長席へ移動)

3. 議 事

[1] 平成27年度入学試験の状況について

[2] 平成26年度進路状況について

[3] 富山高等専門学校 平成26年度 年度計画実施状況について

【遠藤議長】 それでは、ご指名ですので議長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

年度末になりまして、今回、高等専門学校の入試状況あるいは26年度の進路状況、そして、さまざまな計画の今年度の実績等につきまして検討させていただくということです。

日本の教育界も最近文部科学省から大学の入試改革を基幹にして、大学だけではなく、小中高全体の教育と人材育成を見直すという思いを込めた計画が出ています。高校卒業時の基本テスト相当のものを含め、そして大学と高専はどういう人材を採るのか、どういう人材を育てるのかと。日本の教育は人をどう育てるのかという根本的な課題を含みながら問題提起がされていると思います。

その意味では、非常に重い課題を今、日本の教育界は、我々は抱えていると思います。

このような状況の中で、高専の存在は本当に一つの大きな日本の教育界の柱ですので、今日もまた皆様の活発なご意見をいただきたいと思います。存じます。

では、議事に入ります。

石原校長から、1番目の議題であります27年度入学試験状況及び26年度の進路状況につ

いてご説明をお願いいたします。

【石原校長】 本年度の入学試験状況と就職あるいは進学状況についてご報告させていただきます。

これから見ていただく資料ですが、11ページから18ページまでです。まず11ページのデータを見ていただきたいと思います。

折れ線グラフが2つございます。上の方の折れ線ですが、縦軸が倍率をあらわし、横軸が年度をあらわしております。

まず、「志願倍率（全体）」というのがグラフの外側の右側でございますが、データを見ていただきますと、平成24年は3.6倍ほどに達しております。最近は、平成25年度、26年度、27年度は3倍程度。若干微減している状況です。本校としましては、ここ3年ほど3倍程度の倍率であるという状況を見ていただけるかと思います。

より細かく見ましたのは、学科ごとに倍率を示しております。

例えば物質化学工学科は、平成27年度におきましては、倍率は4.7倍程度まで上がっております。今年急激に増えている状況です。

もう1つ、下から2つ目に国際ビジネス学科のデータをご覧ください。今年も3.7倍程度の倍率をとっております。

これら2つの学科の特色としましては、いわゆる女子学生が比較的多いということと、偏差値が比較的高い学生が、基本的には女子学生が高いという状況がございます。

また、電子情報工学科は倍率が今までも高いのですが、特に今年、平成27年度は、前年度と比較して4倍から3倍に下がったという状況です。

まだ原因の解析・分析はしておりませんが、どうも女子学生等が少し減っているような傾向が私の見た限りではあります。

また、機械システム工学科、電気制御システム工学科、この2学科は倍率は変わっておりません。ここ3年間は2.5倍前後で、安定しているという言い方もできるかもしれません。

商船学科は倍率的には、平成26年度までは2倍程度を維持しておりましたが、今年については1.5倍前後まで落ちている状況です。

商船に関しましては、円安の傾向が続いて、船員を雇うのに、今までは外国人を雇う傾向が強かったのが、日本人の船員を雇う方向へ、いい方向に変化していると聞いております。次年度はもう少し学生を確保しないといけないという状況です。

下の表ですが、志願者数を示した資料をご覧ください。傾向的には同じものですが、見

ていただきますように、最近では700人以上が本校を受験しています。富山県の中学校を卒業する学生の総数が1万人ですので、7%は富山高専を受験しているという状況になります。

全国の高専と比較しますと、この割合は非常に高い状況であって、そういう意味では、潜在的に富山高専にたくさんの受験生が来ているということを示すデータになります。

12ページは、今ご説明したものを具体的な数字で示したものです。

以上が平成27年度の入学試験の状況、過去数年間の状況の結果です。

続きまして、就職、進学状況についてご報告をしたいと思います。これにつきましては、13、14、15、16、17、18ページに詳しいデータをつけております。

13ページ、資料2を説明致します。

上の表は、5年間で卒業する学生、15歳で入って20歳で卒業する本科生の進路状況を示したものです。下の表は、さらに2年、15歳から22歳まで本校に在学し、専攻科を修了して、進学、就職する学生のデータです。

割合を見ていただきますと、大学進学が24%、専攻科進学が19%、足して43%です。大体40%強が進学をしています。

そうすると、残り57%ほどの学生が就職をするわけですが、県外へ就職した学生が58名おまして25%。県内就職28%を合計して53%になります。その他・未定者が実は10人ほどおまして4%で合計100%です。

専攻科の進路状況を見ていただきますと、専攻科の学生は現在、修了予定者数が43人ございます。

その内訳を申し上げますと、大学院修士課程へ進学する学生が13名です。つまり30%が大学院へ進学します。

また、就職する学生は、県外就職が12名おまして28%になります。県内就職17名、40%でございまして、これを合わせますと就職する学生は68%おります。

大学院進学が30%、就職が68%ですから、足して98%です。あと1名はその他・未定の学生で2%といった状況です。このような割合は、例年特に変わったものではございません。

13ページの下の方の円グラフについては、今ご説明したものをグラフにしたものです。

14、15、16ページは、本科の学生がどのような会社に就職をしたのかという結果を具体的に示したものです。

資料を示すとおり、就職先は製造業が多いです。製造業、あとは電気・ガス、情報通信といった分野と、物流・運輸とありますが、商船学科の学生諸君が大体こういったところに就職をしています。

官公庁へは、射水キャンパスの国際ビジネス学科が外務省をはじめ法務省といったところに就職をしている状況です。

その他、銀行様、本日お見えになっておりますが、銀行にも就職をしています。

次に、専攻科修了生の就職内定先一覧をご覧ください。製造業、情報通信、物流・運輸といったところに就職しております。

本科を出まして大学へ編入した学生は全国各地の大学、主に国立大学に進学をしている状況です。

もう1つ、専攻科を出た学生がどういう大学院へ進学しているかというデータがございまして、東京工業大学、大阪府立大といった大学院に進学しています。

【遠藤議長】

よろしければ26年度の計画と年度計画実施状況についてお話しただいて議論をさせていただければと思いますので、続けてご説明をお願いします。

【石原校長】 了解しました。後ほどいろいろなご意見をいただけたら非常にありがたいと思っております。

全部で20ページございます。最初に資料の構造だけお話しさせていただきます。

昨年から第3期中期計画が始まっております。これは5年間で平成30年度まで続く予定です。

表の左側の列は本校の中期計画です。高専機構としての中期計画と矛盾するものではないです。それがアルファベットの大文字で(A)と赤字で書いております。真ん中付近に「平成26年度年度計画」、これが赤字のラージ(B)、一番右側の列ですが、本年度の「計画の実施状況」、アルファベットの(C)という内容になっております。

1列目の上から2つ目のくくりの中に、黄色のバックに黒文字で書いてありますが、「1教育に関する事項」というのが実は非常にたくさんございまして、1/20から12/20までございます。また、「研究や社会連携に関する事項」が13/20から15/20という形になっております。

12ページまでが教育、13、14、15が研究に関する項目、あとは国際交流活動が、15/20、16/20と続いております。最後に、管理運営が17/20、18/20、19/20とございます。

1/20に戻りますと、ローマ数字の I とありまして、国民に対して提供する高専としてのサービス、高専がどういう業務の質の向上を図っているのかという項目に対応するものです。

まず、「入学者の確保」というところからご説明させていただきます。

計画の実施状況を見ていただきますと、富山高専の優れた点を PR するために非常勤の職員を雇用して、定期的に県内の中学校を訪問して、本校の PR に努めております。加えて、教員自身が年 2 回ほどは中学校を訪問するというのをやっております。

また、ニュースリリース等により、マスコミを通じて本校の活動を積極的に発信しております。

具体的には、本年度は 1 回、地元のケーブル TV 等に協力して、クラブ活動等の紹介を放映しました。それから、教育関係 31 件、研究関係 16 件、課外活動 112 件のニュースをホームページや新聞等で積極的に発信をしている状況です。

また、年に 2 回ほど、学校説明会を開催しております。7 月の中旬から下旬、3 会場、夏季のオープンキャンパスは 8 月上旬に実施しました。

平成 25 年度から女子中学生の志願者確保ということで積極的に展開をしております。加えて、『高専女子百科 Jr.』を作成しまして、県内の中学校等に配布し、PR に努めております。こういった広報活動を展開しています。

「(2)教育課程の編成等」の取り組みとしては完成年度を迎えたことによりまして、カリキュラム点検を行い、教育課程を見直しました。

下から 5 つ目のブロックをご覧いただきたいと思います。学位授与機構に特例適用専攻科の申請をしております。

特例適用専攻科とは、審査を受けて合格をした専攻科であれば、今まで学位授与機構に学士の申請をしていたところを、それをしなくても修了した時点で学士号がもらえるという制度です。

本校専攻科の中で、エコデザイン工学専攻、制御情報システム工学専攻、海事システム工学専攻、この 3 つの専攻について特例適用専攻科の申請をし、その認定を受けております。

国際ビジネス学専攻については、もう 1 年、年数を待たないと受けることができなかつたため、来年度申請する予定にしております。これが特記すべき一つです。

高専機構全体としてやっている事項としても、共通の問題を使って、3 年生を対象に学

習到達度試験を毎年行っています。

この学習到達度試験を分析することによって、教育力を測ることができないかということをお考えしております。

同じく入学試験も、全国51高専ございますが、同じ問題を使って入学試験をやっております。

ですから、入学試験と学習到達度試験の変化を見ることによって、その学校の教育力を測ることができるのではないかとことを今後行う予定です。

また、昨年度に引き続きまして、後援会、これは学生諸君の父兄に多大な協力を受けております。この後援会と連携を図りまして、本科の4年生、専攻科の1年生を対象にTOEICの受験をさせております。この人数もかなり多い状況です。

続きまして「専攻科において、英語による授業を行うための準備を開始する」の計画の実施状況をご覧ください。本校は国際展開というのを積極的にやっております、授業も英語でやっております。

まだ全てではありませんが、専攻科において一部、3科目程度を英語で授業を行っております。本科におきましても、高専機構から「平成26年度英語力向上取組に関する事業」に採択され、「専門教科英語解説動画コンテンツの開発と授業活用の試み」が採用されたので、各学科2科目は英語でやるとしております。動画の中で、英語で授業をしております。

課外活動としては、特に昨年はロボコン大賞を受賞しました。実は特命フェローの方にもいろいろと指導をしていただいたという背景があります。

「優れた教員の確保」としては、本年度、本校は新任教員を8名雇用しました。これは全て公募でやっております。

従前は採用した教員全てに個室を与えてきましたけれども、十分校務に慣れていない時点から個室にするのはよくないという判断をして、新任教員の居室を1部屋に集めて、担当主事が頻りに訪れて指導をするという体制を作りました。加えて、研究指導に優れた教員をメンターとして配置しました。

また、県内の、例えば富山大学や富山県立大学を意図しておりますが、修士号取得以上という応募条件を説明して、公募に応じていただくよう働きかけてきました。

3年の任期を付して、本校に採用後3年以内に博士号を取得すれば、任期を外す、博士が取れない場合は3年任期満了で退職という制度です。公募制を原則として、博士の学位

を有する者、他の教育研究機関等で実績を上げた者など優れた教員を8名採用しました。

教員に様々な経験を積ませるため、現在、海外の大学との連携を進めております。その中に、長岡技科大と豊橋技科大と高専機構、3つの機関の連携事業として、本校は海外に教員を現在1名を派遣しております。

この事業のほか私どもで開拓した海外の大学に若手教員を武者修行のため派遣するという事もやっております。

女性教員の確保として、本年度は女性限定で教員を公募した結果、1名の女性教員を採用することができました。

現在、高専機構としては、女性教員が3割ほどになるように努力目標を掲げております。現在、年度計画も作りまして、女性をなるべく取り込もうという方向で動いております。

ただ、現状は研究分野もあり、なかなか女性の教員がいない分野もあり、実質的に難しい部分もあります。

「2 研究や社会連携に関する事項」に関してご報告させていただきます。

①は科研費の話や共同研究に関する事項になります。「科研費の申請率を80%以上」と計画しておりますが、現在のところ、まだ80%に至っておりません。まだ60%ぐらいです。

現在、教員は130名おります。その中で80%というかなりの数、申請者が100名ほどにならないと達成できません。今年は70名弱ぐらいが申請をしています。

「新規採択件数10件以上/年」と計画しておりますが、本年度は11件になりまして、これを超えております。

11件と言いますと大したことがないと思われるかもしれませんが、全国51高専の中でナンバーワンです。総件数で言いますと、継続を入れまして27件です。獲得金額は全国の高専の中で1番です。ですから、ある意味では、本校は研究が強いと言ってよいと思っております。

社会貢献の関係では、ある意味では地域の企業の皆様方に信頼していただいて、支援していただく、あるいは頼っていただける高専を目指していろいろ手掛けております。

内容としては、中小企業の製品開発を支援するために、昨年4月に製品開発本部を設立して、記念セミナーを2回開催しました。

現在、共同研究のお話が4件ございました。初年度で4件ですが、これをもう少し拡大していきたいと考えております。これは製品開発に特化した話です。

このほかに、企業技術者のための教育プログラムを用意して、いわゆる新入社員の教育

も手掛けていきたいと思っております。

さらに、それを本校の専攻科の学生、本科の学生に関与させることによって、いわゆる問題解決力を身につけさせるということを今考えております。

昨年の3月には、南砺市と提携を結び、いろいろなことをお互いに持ちつ持たれつでやろうという話を進め、来年の3月、南砺市において小水力発電コンテストを富山高専が代表校としてやることになっております。

参加する高専は東海北陸の高専で国立高専8校と、金沢高専も加わり、9校で実施します。

「国際交流等に関する事項」として、昨年9月に、材料系の強い大学で中国の瀋陽にある東北大学と国際セミナーを開催しました。今年も実施の予定です。

昨年の11月にはタイのバンコク キングモンクット工科大学ラカバン校、「KMITL」と言っておりますが、そこと本校が中心となって国際会議を開催しました。教員が10名ほど参加して、その結果を国際雑誌に載せるというところまでやっております。

このほか、シンガポールのナンヤンポリテクニク、テマセクポリテクニクと交流しております。それから、KMITLと国際会議あるいは学生の交流を行っております。

英国の北アイルランドのSERC等とも教員交流も含めて行っております。

ハワイのKCC、カウアイ島にあるカレッジとは工学系の英語圏異文化実習等を実施しております。

こうした様々な国際展開をして、最近ハンガリーの物理・材料研究所、パズマニー大学、ブダペスト工科大学へ教員の派遣や学生の交流を進めているところです。

「Ⅲ 予算」を説明致します。

昨今、財政難で、本校も毎年のように1%効率化係数がかかって予算が減り、管理経費に至っては3%減っています。通常の国立大学法人よりは影響が大きいという状況です。

そういったことで、様々な形で外部資金を獲得したいという思いがあり、実施状況として、本校の試みを示しております。

受託、共同研究も今のところ40件程度ですが、本校の実績は、全国の高専の中では一番多い状況です。もちろん地元にはいろいろな企業が多くあるというメリットもありますが、これは堅持していきたい。実績として寄附金等は募集をしています。本校は今年10月5日に50周年記念式典を開催する予定でそのときの寄附金ということで、国際交流基金を集めようと計画しています。このほか、製品開発本部を立ち上げ、企業のニーズに応える製品開

発を進めること、同じく企業のニーズに応える企業技術者教育を実施することを進めていきます。

これらが実施できればいわゆる財政難の折から予算が減っていくことを解決できるのではと思っております。

また、シニアの方々にできるだけ協力を仰いで、教育・研究をやっていただけるような仕組みを考えています。

【遠藤議長】 ここで適宜ご休憩をおとりいただきたいと存じます。15時から議論を始めさせていただきます。

〔午後 2時49分 休憩〕

〔午後 3時00分 再開〕

【遠藤議長】 議事を進めたいと存じます。質疑応答を始めさせていただきますが、先ほど、入試に対する志願倍率のこと、就職の内定状況等のご説明もございました。この点も含め、「教育に関する事項」から入らせていただきます。

富樫委員からお願いいたします。

【富樫委員】 よろしく申し上げます。

富山高専の優れた点をPRするということで、県内の中学校に説明に来ていただいております。大変その説明は分かりやすく、参考になります。

ただ、口頭やパンフレット等の説明だけでは、なかなか実態がよく分からなかったというのが我々教員の実情です。

学校説明会やオープンキャンパスに参加している生徒は、実際に体験することによって高専の魅力と素晴らしさを肌で感じ取ってきているわけですが、そこに参加していない生徒もいるわけです。そういう生徒たちに、高専の特徴や魅力というものを教員が、特に3年生を担当している教員が伝えるときには、なかなかイメージがわからないというところがありまして、今年度、まずその手始めということで、富山市内の中学校は26校ありますが、そのうち役員をやっている校長が11名、11月に本校にお邪魔して、私も初めて見まして、本当にすばらしい装置とか、そういう施設見学をさせていただいたり、学生さんお二人に、学んでいる様子、取得できる資格ですとか、そういう話を生で聞いたりすることに

よって、その後、意見交換もさせていただき、学校に持ち帰って、参加した11名の教員は今まで以上に詳しく本校の説明を3学年担当者にできたと思っております。

あわせて、これは富山市の中学校長会でも、そのときの話はさせていただきました。

ただ、富山市以外の中学校には、まだそれが浸透していないところがありますので、せめて3学年主任等が実際に施設を見学できたり、お話、説明をできるような機会を設けていただけたら大変ありがたいと思っております。

それと、本校も今年度はたくさん受験させていただいたわけですが、女子生徒が物質化学工学科と国際ビジネス学科を受験しております。やはり女子生徒向けのリーフレットはすごくすてきなものであったかと思っております。

富山市内の校長からの意見ですが、3年生になっていきなり高専を知るよりも、中学校1年生、2年生の段階から、高専での学習の素晴らしさを動機づけできればよいと思います。

本校の2年生は、高校の先輩に学ぶ講演会というのを、県立高校の入試の日に本校の卒業生、高専の先輩も来て、学校生活の様子を話してもらいました。それを聞いた子たちが今の3年生です。あるいは高校説明会は3年生になりますが、高校説明会では実際に高専の先生に来ていただいて説明いただき、2年生では先輩、1年生ではキャリア教育の一環として、働く人に学ぶ講座というのをやっており、そのときにも高専の先生に来ていただいて、実験の話をしていただき、そういう過程を積みながら、高専の魅力というものがPRできていくと思います。ですから昨年度、一昨年度よりも今年度の方が高専のことをよく知る機会ができたと思っております。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

続けて、「教育課程の編成等」に関して、佐野委員からお願いします。

【佐野委員】 教育課程につきましては、やはり学校として学生にどんな力をつけたいのか、あるいは社会のニーズ、こういった点を踏まえて、取り組むものかと思っております。

今年度、完成年度ということで、次年度入学生からカリキュラムの見直しもされたということですが、とにかく昨年までやってみてよかったから続けていくということも往々によくあることではあるのですが、常に何のためにやっているのかとか、意味を問うといったことは、やっぱり学校教育の場合は大事になってくると思っております。

私たちは県立高校の教育課程、特別活動等の指導に当たっているわけですが、この点は常々よく言っているところです。

今日の資料を見せていただきまして、課外活動、英語教育にも力を入れておられるといった点、ボランティアや社会奉仕活動等にも力を入れておられる点に、学校としてこういった子どもを育てたいといったものがあらわれていると思ったところです。

2つ目に、本日、統一問題の入試と学習到達度試験を活用した、いわゆる教育力の検証といったことに今後取り組んでいかれるということで、これは非常に楽しみだと思っております。

どういった教育活動によって学生が伸びていくのか、そのあたりまで深められると、本当に参考になると思ったところです。

最後に、授業評価ということで、学生に質問し、調査、それからピアレビューという二本立てでやっておられる授業評価というのは、教育の質の向上にもつながりますし、学生ニーズの把握といった点にも役立つかと思っております。非常に難しい部分もあるかと思うのですが、ぜひ個々の先生方の教育力の向上、指導力の向上につなげていただければと思っております。

昨年11月、初等中等教育関係では国が次期学習指導要領の改訂に当たって、中教審に諮問がありました。その中に、課題発見、課題解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ学習としてアクティブ・ラーニングといったことも盛り込まれているところです。

ぜひ高等教育機関におけるそういった取組み等があれば教えていただければと思っております。

【石原校長】 まず、富樫委員からのお話で、昨年度は富山市の校長先生方を対象に、最初の試みとしてやらせていただきました。今度は西の方も含めて、少し活動を広げたいと思っております。

同時に、基本的には中学校にこちらから訪問させていただいて、例えば中学校と高専の連携でできるような事業というのを何か、こちらでお役に立てるものがあればやっていきたいと思っております。

できる限り、中学校を訪問する機会を増やしていきたいと、関係を深めていきたいと思っております。

これについては、訪問させていただいたときにご相談をさせていただきたいと思っております。

統一試験等を活用して教育力がどうなるかということですが、今年、実はそういった話が出てまいりまして、たまたま高専が入試と学習到達度試験をみんな同じ試験でやってお

りまして、それらをはかる一つの尺度になり得ると。例えば入学時点でそれほど高い能力ではない学生でも、あるいは学校の偏差値が低い学校でも、卒業のときにはすごくよいことがあると思われま。それぞれで高い教育力を伸ばしたといいますか、学生の能力を伸ばした学校で、どういう特色のある教育をしているのか、そこを抽出していくのが目標であろうと思っています。それはぜひやりたいと思っています。

アクティブ・ラーニング、「PBL」と言っていますが、問題を設定して、その課題を解決する中で自主的に勉強していくといったことは高専でも非常に大事だと考えております。

それと、高専で特に専攻科で入学時点で何か課題を与えて、解決していくのことに特別な授業を用意していますので、そういったことも役に立つかと。

それから製品開発本部の中で、学生が自分の研究として取り組むことで具体的な課題としてやっていく中で、それは培うことができるのではないかと考えております。

高専としては、実践力が第一ですが、やはり地域で自分がどういう役割を果たせ、貢献できるかを考えることができる人材をぜひ養成していきたいと思っています。

【遠藤議長】 次の話題で、「優れた教員の確保」の部分で、松本委員からお願いします。

【松本委員】 全体的に非常にきめ細かく取組みをされている印象を受けております。我々も参考にさせていただきたいような部分もあって、何点か質問、コメントをさせていただきたいと思います。

教員の採用と教員の育成に関する部分、教員の評価に関する部分、それと、学生アンケート結果に基づいた表彰といったことが書いてありますが、そういった3点について少し教えていただければと思っています。

最初ですが、公募による採用と、入ってからいろいろな取組みで育てていくということをしていると思うのですが、そういう意味では、採用による部分と、中で育てていく部分のバランスというのはどんな感じが出ているのかと。非常に難しいところと思っているのですが、その辺はどうされているのかと。参考にさせていただきたい。

それに関連して、新しく採用された方に対してはメンター制度を導入され、これは、非常にいい制度と思っています。

優秀な熱意のある先生を採用した場合、そういった熱意があつて優秀な人ほど、あるいはいろいろなレベルの高い組織や機関でやられてきた人ほど熱心に指導して、学生との間にいろいろな問題というかトラブルというか、そういったものを発生させる可能性がある。

そういった面で、こうしたメンター制度というのは非常にいいのではないかと思います、まだ導入されて間もないのでしょうか、どういった感じなのか、少し教えていただければと思っております。

もう1つは、評価に関する意見ですが、教育、研究、地域貢献、大学管理という形での評価指標はどの程度、例えば先生方の研究費とかにフィードバックされているのでしょうか。

フィードバックされているのであれば、例えば通常どういった組織でも、トップ20%、真ん中60%、下位20%とよく言われますけれども、そういった中で、頑張っている人が報われるような仕組みになされているのでしょうか。

その反面、なかなか業績が出てこない方へのフォローというか、そういった仕組みが考えられているかどうか、その辺、非常に重要なところだと思うので、優秀な先生を育てていくといった意味では必要な点と思っています。

最後ですが、学生アンケートの結果に基づいて表彰する制度があるということですが、それは、学生のアンケート評価イコールいい教育という形で全て捉えていいのでしょうか。その辺はどういうふうに進められているのかなというのをちょっと教えていただければと思います。

【石原校長】

まず、教員の採用については、全て公募で実施しています。

書面による審査と、プレゼンで選びます。比較的多数応募していただいていますので、その中でできるだけいい人、しかも女子教員をできれば採用したいという気持ちで採用しています。

採用してからは、これは昨年からの話ですが、1年間同部屋に入れて、7、8人が一緒に授業で悩んだり、あるいは校務で分からなかったりするときに、お互いに相談できる形をとっています。もっと広々と使いたいなど不満もあるとは聞いており、1年経ったところでこの4月からは個室屋に移します。

メンターの先生は定期的に新任教員の部屋へ行って、問題点を把握したり、モチベーションが下がらないようにやってもらっています。

加えて、外部資金の応募は必ずやりなさいという取組みをしております。

育てるということに関しては、例えば大学の名誉教授クラスの方々でご定年になった人に本校で研究してもらい本校の教員と一緒にやっていく中でさらに伸ばしていくことをし

ていきたいと考えています。

評価は、例えば企業と共同研究をやるのが非常に得意な教員、あるいはデザインして製品を作るのが得意な教員、あるいは教育に非常に特化して優れた教員と、できる限り得意なところを評価するシステムで、総合力で考えています。

【松本委員】 研究費へフィードバックなどはされるのですか。

【石原校長】 研究費は、外部資金を得た者は、例えば技術振興会から寄附したお金の中から、その半額を渡しています。例えば30万円外部からもらったら、30万円学校から補助をしますから60万円になるというやり方で今やっています。

もちろんそのほかにインセンティブはないのかというと、特色が伸びるような仕事を与えてあげるとか、そういうポジションにつけるとか、それも一つのインセンティブだろうと思っています。

【西田副校長】 学生のアンケートや教員のアンケートに基づいて教員の表彰制度というものがありまして、毎年選んでおります。

【松本委員】 我々のところも、授業アンケートみたいなものをとっていて、その評価をそのまま受け取るといろいろと問題があるという議論がこれまであって、本来やるべきことをやらず少し内容のレベルを下げてやることで学生の評価を上げるということも一時期あり、なかなか難しいです。

【成瀬副校長】 確かに先生がおっしゃるところ、同じことを感じる場所がありまして、学生の評価がいいから、その授業が本当にいいかというのは、いい場合もありますけども、一概にはそうでない場合もあるということで、本校の場合はアンケートは2種類、学生のアンケートと、年に前期、後期にピアレビューですか、お互いに互見授業をやっています。その教員のアンケートが2種類ありますが、どちらも必ず学科長を通して、その授業担当者と話をするというような形をとっています。

学科長は大体クラスの雰囲気分かっていますので、そういうところも加味しながら、学科長から担当の先生と話をするという方式はとっています。

先生がおっしゃるような形で、うまく解決策はなかなかないのですが、一応そういう形をとっているということです。

【松本委員】 ありがとうございます。

【遠藤議長】 松本委員は難しい質問を幾つかされましたけど、メンター制度を含めて、諸制度をどう整理して運用するかは、常に試行錯誤の積み重ねかと思います。

続きまして、「教育の質の向上及び改善のためのシステム」ということで、正橋委員からお願いします。

【正橋委員】 新規で取り組まれた件数が4件ほどあったように思います。

1番目の物理、化学の授業に実験を積極的に取り込み、学生の興味を喚起するとか、本科の学生の問題解決力、コミュニケーション力、積極性を向上させる。後半の方にも、高専改革推進経費等の教育推進を通して、学習教材の開発やプログラムの構築を行う。その下の本校学生のための教育カリキュラムに、企業と本校とが協働して検討するというところで、新しい取組みをこれだけしていただけるのは大変よろしいこととっております。

また、前回、英語教育というお話もさせていただきましたが、eラーニング、ICT活用教育ができるように機器等も準備をされて、外国語の教育にもこれから力を入れていけるのかなということで、大変いいことだと考えております。

「本科の卒業研究、専攻科における特別研究の内容を見直し、実施方法を改善し、学生の問題解決力、コミュニケーション力、積極性の向上を図る」という中で、学会発表、海外インターンシップ等によって向上が図られたということですが、その辺の実感といいますか、我々もそういう社員の考え方とかを変えていくというのはなかなか難しいところがありまして、どのくらいよくなったと実感されていますでしょうか。

【石原校長】 実はこういった経験をする学生というのは、そう数は多くないです。ただ、インターンシップというのは割と最近、年間何名ですか、それなりに出していますが、基本的には積極性が増すということは感じます。帰ってきてからは、ものの捉え方あるいはいろいろなことに取り組む姿勢が今までと違うと感じます。3週間のインターンシップで、それは1回でも随分違うなという気はいたします。

ですから、答えは1回でもあるということで、それが継続するかという話になると、答えは多分違うのだと思います。

【正橋委員】 でも、今後人数は多くされるというような考えですか。

【石原校長】 はい。人数は増やしていきたいと思っています。そのために海外の提携先をいろいろ選んでいます。

人数を多くすると、今までは学生自身が自費でかなり出すので、ご父兄の負担も多くはなるのですが、ただ、その分のメリットはすごくあるなと考えています。

学会の発表ですが、非常に人が偏ってしまうといいますか、優秀な学生は、例えば2回も3回も行ったりする学生もたまにいますよね。それから、その研究室がよく行く

ようなところであれば割と偏ると。行かないところは行かないというところがございます、その辺はどこにいるかでかなり違う。すごく積極性が増しまして、例えばこの前も、どこかのプレゼンとか何とかで何とか賞をもらったとかいう学生が結構いるんですね。大学生に伍して選ばれるというケースが結構あります。大学生を抜いて1位になるとかですね。ですから、その効果はあると思っています。

ただ、なかなか数は増えないと。研究室とか教員のどこにいるかで、運不運というわけではありませんし、本人の資質にもよりますが、そういう意味ではすごく優秀な学生がいることは確かです。

【正橋委員】 せっかくの取組み課題なので、少しでも多くの学生さんがそういうことを体験するだけでも、すごく自分にとってフィードバックがあると思うので、やれる手法がまたあればいいのかなと思います。

【石原校長】 今おっしゃった内容と対応すると思うのですが、キャンパスに外国の学生を呼んで、例えば3週間あるいは3カ月間一緒に生活をしたり、話し合いをする機会がありますので、そういったことを経験させるのも一つだろうと思っています。ですから、派遣と受け入れの両方を組み合わせてやろうとしています。

【正橋委員】 基本的には、海外との接触みたいなところに重きを置いていらっしゃるということですか。

【石原校長】 おっしゃる意味は、国内の接触を含めてという意味ですね。

【正橋委員】 はい。

【石原校長】 例えばロボコンだとかプロコン、プログラムコンテスト、デザインコンテストというのがあって、ほかの学校の学生諸君と一緒に競うところはもちろんございます。それはあまり長期にわたるものではございませんので、私どもとしましては、基本的にはインターンシップで実践力を高める、企業様には非常にお世話になっておりますが、その辺に力を入れることと、やっぱりグローバルな視点ということで、海外との連携で交流を図っていくという、その2つでしょうかね。

【正橋委員】 分かりました。ありがとうございます。

【遠藤議長】 学会発表は国内と海外の両方がありますか。

【石原校長】 はい。

【遠藤議長】 海外との交流によるグローバル力の向上について、学生時代の経験をすぐに評価はできないかもしれませんが。社会に出てからどうやってフォローアップして、例え

ば1年間の留学経験がどのくらいの形でその後の成果にフィードバックされるものなのか、全体としてどう評価していくのか課題だと思います。

今、「トビタテ！ 留学JAPAN」で文科省が積極的に企業と連携して始めていますけど、それをどう評価して、結果をどう今後につなげるかということに関しては検討が始まっているようです。

続いて「学生支援・生活支援等」のことにつきまして、石山委員からお願いいたします。

【石山委員】 学生支援の関係でいきますと、11/20で報告のありました「上級生による成績不振学生へのチューターを実施」というのは新規でしょうか。これは寮生が対象でしょうか。チューターでやって、成績の悪い方々に対してある程度指導をするということは、それなりに意味があるのかなというふうに私は思いました。

【高熊寮務主事】 過去からやっております。何年もやっております、3、4年生の学生が、1、2年生の学習に困難を感じているような学生たちを集めて質問教室のようなことをします。ただ、下級生は上級生にすぐに質問できなかつたりで、学習成果をはかるというよりは、どちらかというと寮内での学習習慣みたいなものの形成という狙いで従来実施しています。

【石山委員】 これは寮生の間でやっているという話ですね。

【高熊寮務主事】 はい。

【石山委員】 それは一応効果としてはあるのでしょうか。

【高熊寮務主事】 それはあると思います。

【石山委員】 通学生に対しては。

【石原校長】 基礎学力が足りない学生に対しては、特命フェローという人をお願いしまして、学校をおやめになったシニアの方で、物理が弱い、数学が弱いという学生のために、ある特定の部屋にいてもらい、そこへ学生が質問に行くという体制を今後増やしていきたいと考えています。現在は2人ですが今後人数を増やしていきたいです。

特に、最近数学や理科でつまづく学生が最近出てきておりますので、その辺をもう少しケアしようということで、それを昨年から取り組んでいます。

【石山委員】 それは多分いいと思いますので、ぜひやっていただきたいと思います。

授業料免除の関係、奨学金制度の関係で、ちょっと広報活動が足りないような気がします。今、日本国中で問題にされていますけど、貧富の格差だとか教育の格差だとか言われていまして、事実上、教育を受けられない方が結構いるということで、奨学金をちゃんと

出さなくてはとされています。

高専は国立ですから授業料が安いということで入学される方が多分多いと思います。授業料免除や奨学金がありますということをしかりと分かるように、中学の1、2年生のころから説明をしていただきたい。高専に入るというのは、5年で就職できるということ、5年で大学ぐらいの実力を持って就職できるということで来るわけです。つまり2年間短縮して就職できる、2年分先に給料がもらえる、お金を稼げるということで来るわけで、自宅の資金力があまりないから来るという方も結構いるわけですので、その辺のところをしっかりと周知してあげて、ぜひそういう方々も含めて高専へ来ていただくようなことを、学生が入ってきてからの話は当然しなければいけないと思いますけども、入る前から、そういう制度があるということ、中学校へ行って説明していただければ、高専としてのPRはできると思いますので、よろしくをお願いします。

それから、「OBやシニアフェローを招聘する」とあります。OBというのは基本的に卒業生でありまして、同窓会員です。できれば同窓会の方にもご連絡いただければ、多少同窓会の方でも支援をしていきたいと思えます。

OBで、卒業生であるというのは当然同窓会員ですので、同窓会にご連絡いただければ、同窓会の方から少なくとも交通費ぐらいは、どこか遠いところから来る人であれば、同窓会から支援をする。それは同窓会の活動にもなるわけですので、同窓会としても協力できることもありますので、ぜひご連絡いただければと思うところです。

【遠藤議長】 貴重なご意見だったと思えますし、同窓会のご支援はなかなかありがたいことだと存じます。

【石原校長】 はい。ご連絡させていただきます。

【遠藤議長】 それでは、続けます。「教育環境の整備・活用」につきまして、及川委員からお願いいたします。

【及川委員】 私から2点ほど質問をさせていただきます。

1つに、学校として、中学生を対象にした志願者対策ということでは、県内、県外でも岐阜とか石川ということで表記されているのですが、我々船に関するところから見ますと、船主協会が進学ガイダンスというものに取り組んでおりまして、これは一過的なものですが、いろいろと効果もあるのかなとは思っております。

商船学科の生徒という、県外の方も多いと思うのですが、その辺に対する案内というのはどんな方法をとられているのかなというのが1点。

もう1つは、商船学科卒業生に対して就職率を上げるということでいろいろ検討されていると思うのですが、海事人材育成プロジェクトも非常に業界からも評価を得ていると思うのですが、それ以外では何か具体的な取組みというのは検討されているのか、この2点について教えていただければと思います。

【石原校長】 1番目の話ですが、商船系ですと、地元ばかりではなくて県外もという話ですが、4つほどやっております。

1つは、県外で受験をしていただくようなシステムを実施しています。今年ですと札幌でやりましたし、仙台、東京、京都でもやりました。全国で受験をしたいという学生がそういうところに出向いて、受験をしていただく仕組みをやっていきます。

2つ目は、5商船で共通したパンフレットを作成して5商船が連携してやっています。

3つ目は、支援をいただいて商船学科だけのパンフレットを作らせていただき、東北、関東の中学校に送りました。

さらに各高専の連携のもと、例えば福井県に商船学科はありませんが、商船学科のない高専の先生方が中学校を訪問されるときに、うちの商船学科のパンフレットを持って行ってPRしていただくということをやっています。

そういったことも含めて、基本的には、これから船乗りになるということの掘り起こしをぜひやっていきたいと思っております。

【遠藤専攻科長】 海事人材育成プロジェクトを実施しております。OBのキャリアガイダンス、OBの講演会、特に「船員となったOBの講演会」については、現代GP以来、毎年1回、ビデオ会議システムを使って実施しております。なかなか5校の商船学科のプログラムが合わないというところがありますけれども、実施しております。

また、OBのキャリアガイダンスといいますか、大手船社の人事担当者が来るときに、本校のOBと一緒に連れてきて案内してくれるということで、キャリアガイダンスとして成立しているかなと思っております。

今、海事人材育成プロジェクトで海運会社との連携がかなり強化されまして、今は海事・海運関係の人事担当者が「呼んでいただければお話にまいります」というような関係にもなってきておりますので、入ってから育てるところもありますので、低学年からのキャリアガイダンス等をまた考えていきたいと思っております。

以上です。

【遠藤議長】 県外からの入学生というのは何%ぐらいいらっしゃるのですか。

【遠藤専攻科長】 2割ぐらいだと思います。

【石原校長】 40人の中の2割ですから、それほど多くはないのですが。

【遠藤専攻科長】 石川県を抜きますと、5%を切ってしまいます。富山、石川でほとんどです。

【石原校長】 昔は北海道も結構いたそうですが、最近は少なくなったようです。

【遠藤議長】 分かりました。

続きまして、研究や社会連携、それから国際交流の協議に移りたいと思います。

藤堂委員と金岡委員からそれぞれコメントをいただきたいと存じます。

【藤堂委員】 研究活動活性化の中では取組みが十分行われて、大変立派だと思っています。本当に実績を残されていると思います。

さらに、現在の活動を推進するために、計画と計画の実施状況に記載されている内容をちょっと評価し、計画に対する評価を「○」とか「△」とか「×」などで簡単に表記すれば成果が分かりやすくなるかと。全体の、こうしました、こういうような計画でという中で、それが本当に「○」だったのか、やったけども、ちょっと「△」なのか、いや、全然だめだったのか、これを見ていてもどうだったのかなというのが見えてこないの、優先的に実行されてもよいのではと思いました。

数値であらわせるところはあらわして、あらわせないところは、比較できるようになればよいのではないのでしょうか。

国際交流に関しては、現在、円安が進行していますので、以前と比較すると海外から日本に訪問しやすい環境になっているのではないかと思います。

このような背景を利用して、国際会議や国際交流の学生のインターンシップなどを国内で実施することも考えてもよろしいのかと思います。

いろいろと解決していかなければいけない課題もあると思いますが、できるだけ現実に計画があれば検討してみたらよろしいかと。

【石原校長】 おっしゃったとおりかもしれません。

こちらの期待していたものがどの程度達成できたかという尺度があったほうが、より達成度が分かるということですね。

次年度から考えてみます。そのほうが達成度という意味では分かると思います。

【遠藤議長】 金岡委員、お願いします。

【金岡委員】 平素、銀行業務を一生懸命やっています。「研究や社会連携に関する事項」

に限りまして、石原校長さんから詳細にご報告をいただきました。ここに書いてある以上の数字も、私たくさんメモをしましたけども、補足的にお話しになりました。

中期計画ベースで言いますと、例えば科研費の申請件数等を見ても、高専さんは51高専の中で非常に採択率も高いし、金額も大きいと言われたと思います。結構だと思いますが、科研費のほか、外部資金みたいなものをもっと取り入れなければいかんというようなことが書いてあったのであろうと思います。

さて、高専さんは、機械システム工学科、電気制御システム工学科、物質化学工学科、電子情報工学科、国際ビジネス学科、商船学科と6つの学科を持っておられるわけですね。このテーマからしますと、130名ぐらい教員がいると言われましたけども、例えばその研究の成果を製品開発するとか、基礎技術に貢献するとか、もっと言うと、技術者教育プログラムという人を養成するとか、要するに、地域社会にいかんに貢献をするとか、地域の企業にいかんに貢献するとかという目的でやっておられると、こういう大きな動きとして捉えるのだらうと思います。

さて、私の印象ですと、石原校長がおっしゃったように、研究や社会連携に関して、富山高専さんはよくやっておられると思います。これは後から理由をもうちょっと申し上げますけれども。

そこで、研究となると、私は銀行屋ですから学校のことはよく分かりませんが、例えば共同研究をするとか、企業からの委託研究をするとか、学校同士が提携してやるとか、いろんなバリエーションがあるのであろうと思います。そうすると、いろいろ研究しておられる方が各研究の成果といかんに結びつけるか、今風に言いますと、マッチングとかコーディネートとかコーポレートとかいう形で結びつけるわけですね。そうすると、個々の研究者が研究成果との間を自らコーディネートするというのは、私はなかなか難しいだらうと思います。そうすると、学校としてコーディネートをするような人が私はぜひ必要なのであろうと、強く思います。

コーディネートする人がいなければ一生懸命研究されてもなかなか成果が、自分で研究される分にはいいのですが、その成果が地域に貢献するとか何だとかという形で結びついてこないだらうと私は思います。

私は、今日は富山第一銀行奨学財団の理事長という肩書きでやって来ました。これは意味があるのだらうと思います。

富山第一銀行奨学財団というのは、大学、高専に研究費を出しているわけです。今年は、

うちは相当寄附をたくさんもらいましたから、研究費は大分増額できるだろうと。それはそれとしまして、奨学財団では毎年、研究成果発表会を開きます。これは、前年度研究された人に、1年たってからその研究の成果を発表します。

その発表会には企業の方も見える、企業の方が見るとすれば、研究発表されたものが企業化できるかどうかということを見にこられる方もいますし、同じ大学の方が研究の成果を聞きたいと行って来られる方もあります。

奨学財団は、マッチングのためにやっているとは言いません。ただ、そういう場を提供しているだけですが、そのときに、研究成果をどうマッチングするか、そのマッチングの場を提供しているんだという意識が多少あるんだということを理解していただきたい。

銀行ではビジネスマッチングという場を持っています。北陸三県では福井銀行と北國銀行と私のところの3つの銀行で「FIT」という、F u k u i、I s h i k a w a、T o y a m aの略ですけども、ビジネスマッチングを毎年やっています。そこで高専さんはブースを出しておられるかどうか私は分かりませんが、何のためにブースを出しているかというと、マッチングのためと言ったって、たくさんのもやいろんな業者が出てきますから、私は、情報交換だとか、自分のところの研究はどれくらいの価値があるのかとか、いろんなことの情報収集だとか、判断だとか、人脈を広げるだとか、そういう意味でブースを出されるのだと思います。

よく私が言うのは、研究成果との間をどうマッチングするのか、どうコーディネートするのかという機能が強くないと、研究が社会連携にうまくいくかどうかという成果が上がってこない、私はそう思います。何か意見がないかと言われると、私は、高専さんで誰がそのコーディネーターの役をやるのか。

もとに戻りますけど、この資料は、「研究や社会連携に関する事項」だけ読ませてもらいました。これには15ほどキーワードがあるんです。例えば企業と連携をして製品開発のための実践の研究会何とかをやるとか、産学官金交流会がどうだとか、何とか技術振興会議を開いたとか、その実態をコーディネーターの方にはよく勉強してもらいたい。

そういったものを見て、これはとどめみたいな言い方ですけども、国内の国立高専さんがあるでしょう、それから、ここに遠藤学長もおられますけど、富山大学の工学部だとか、北陸先端科学技術大学院大学だとか、長岡技術科学大学だとか、富山県立大学の研究した分をどうやって成果としてマッチングさせていくかという実例をたくさん集めてもらいたい。そして、高専の研究成果を具体的にどんな形でマッチングさせるかということの参考

にしてもらいたい。それがないと、6つの学科がありますけど、その研究が成果に結びつきづらいという、私は、制度・仕組み上の欠陥を持っているのではないかと思います。

銀行でいうと、ビジネスソリューション部という部がありまして、ビジネスに関して出てくるいろいろな問題を解決する部です。当然、ビジネスソリューション部がビジネスマッチングもやっているわけです。

ですから、そういうセクションがないと、各支店長が取引先へ行ってビジネスマッチングをやれと言ってもちゃんとした仕組みとして、マッチングがよりスムーズにいくような仕組みがないと、ただやれと言ってもこれはハッパをかけても、大和魂をかけても、特に研究というのは、そういうことを上手にやらないとなかなか成果にまで結びつかないと。そうすると、研究費みたいなものもなかなか外から流れ込んできません。

私、今あまり意味があるようなことを言っているとは思いませんが、でも、さらっと見ますと、感覚的にいうと、そんな感じがします。

富山高専でコーディネートをやると、そんなことです。

【遠藤議長】 ご指摘の点は、本当にそうだと思います。コーディネーターというのは、存在が本当に難しいと思います。今、富山県内の、あるいは近辺の高等教育機関等々のことも出されましたが、少なくとも富山県だけにおいても工学系だけでいっても共通のビジネスにつなげるための取組みを、各教育機関が、競争、切磋琢磨は必要ですが連携するところは連携しつつ、富山県としての全体のコーディネーションをどうするかとかいうことも当然考えていかなければいけません。誰がどう仕切るか、しかもこれは継続的にある程度やらなければいけないと思いますので、皆さんの知恵を出し合いながらやる必要があります、金岡委員がリーディングしていただければ前進できる場所もあると存じます。

【金岡委員】 そんな感じがしておるということです。

【石原校長】 まさにおっしゃるとおりだと思っています。日本の大学と企業との関係というのは、その点が一番弱いところであると思います。

富山高専としては、コーディネーターを5名雇用して、それなりの結びつけをしようとしているのですが、多分ほかの、国立大学を含めて、皆弱いところは認識しているところでは。ですから、そこは超えていかないといけないという認識はしております。

【遠藤議長】 それではもう1点、「管理運営に関する事項」です。業務運営の効率化と予算関係です。犬島委員、お願いいたします。

【犬島委員】 前にも私、申し上げましたが、「戦略」という言葉を多用されていますね。

例えば学校という命題があつて、講座数が決まっています、定員も決まっています、先生もそれによって自動的に決まる。それから予算で縛られている。こういう中で、事業運営とか予算管理だとかの自由度というのはどれだけあるのかと。裁量でうまくやれる余地がどれだけあるのかということは、一般民間人にはよく分からない。

民間だと、結構自由度があります。そこら辺の感覚がひょっとすると違うのかもしれない、あまりないのではないかなど。それにしても命題が大きいという気がします。

20/20ページに、何をやりたいかというのが書いてあります。これはすごくいいと思います。ぜひおやりになったほうがいいと思います。

いろいろとお金を儲けるためにどうするかとか、これはぜひおやりになればいいと思いますが、反面、学校当局がこんなことで悩まなくてはならないのかと。富山大学さんも同じことですがどうも何か方向が違うのではないかと。誰がこれを直せるのだろうかという気が一つはします。

それから、以前申し上げたかもしれませんが、効率化が1%で管理費が3%減、これはいつまで続くのでしょうか。全くこれについて言及がない。孫悟空の輪ではあるまいし、どんどん締まる。これは一度、何か共通の問題として提起されたほうがいいのではないかと思います。

最後は余談ですけれども、XPを8にかえられたんですか。

【石原校長】 はい、かえました。

【犬島委員】 あれ、個人的には大変使い勝手が悪い。これを強制的にかえさせられるというのは、技術学校としていかなものかなど、これは余談です。失礼しました。

【遠藤議長】 金岡委員に続きまして犬島委員から、根本的なところでご指摘がありましたが、石原校長、いかがでしょうか。

【石原校長】 基本的な方向は私も同感でして、実は予算が毎年1%ずつ削られて、これが10年ほど続いております。文科省の予算も1兆程度にまで下がってきております。ですが教育の質を落とすなという非常に難題を我々は突きつけられている状況です。

それでお金が必要ならば外部資金で稼げというわけですが、外部資金は、実は稼いでもそれをすぐに自由に使えない縛りになっております。稼いだお金はすぐその年に、例えば独立行政法人ですと、その年の間に使えと。

例えば科研費で申し上げますと、間接経費30%と直接経費70%で、我々は30%の間接経費はある程度学校で使えるというお金だと思っています。ですから、稼いだものがそのま

ま使えない。もちろん教員が研究で使っていただくのはいいのですが、そういう状況もあります。

それから、製品開発本部でいろいろお金を稼いだとしても、それがすぐに使えないお金になっています。寄附金で出してもらわないと、我々は使えないのです。共同研究費の形で受け入れたら、その研究にしか使えない、学校全体に使えないという非常に強い縛りがかかっており、実は私どもも非常に困っています。

最近、いろいろ政治の力も借りて、何とかこういう状況を変えていかなければいけないという動向があり、高専機構を考える議員連盟というのができました。その中に30名程度議員が加われ、富山県からはお二人ほど入っていただいています。その方々等に現状話をして、やっぱりやりづらいものは変えていくような、仕組みを変えるということも必要だろうと思っています。我々の力ではどうしようもないというところがありますので。

そういう状況です。

【遠藤議長】 今日はいろいろご議論いただきました。

犬島委員のおっしゃったことの一つの答えになるかはわかりませんが、石原先生のところは独立行政法人、我々は一箇一箇の大学が国立大学法人。昨日、東海北陸地区の学長会議がございまして、文科省からの出席もあり、意見交換しました。少なくとも今までの既存の日本の国が育ててきた教育のベースのところを、財政的なものから大きく方向転換と、非常に揺れている状況だろうと思います。

松本先生のところも4月から法人化ですので、国家予算がどういう形で教育に回しているのか、本当にますます厳しくなっております。

この状況の中いかにして打破してやっていくかです。

でも、今日は高専で取り組まれているパワー、いろいろ工夫されて、非常に前向きなあれをお聞かせいただけたと思います。

どうぞ今日出された意見、幾つか貴重なご提案もあったと思います。例えば藤堂委員からのご意見。自己評価でもよろしいと思いますし、事柄を客観的に評価しながら一步一步進むというのも大事だろうと思います。

皆様からいただいたご意見をぜひどうぞ学校側で咀嚼していただいて、いい形でまた提案あるいは実行していただければと思います。

学校側から、石原校長、最後にどうぞ。

【石原校長】 今日は、貴重なご意見をたくさんいただきまして、本当にどうもありがと

うございます。

一つ一つできるものを実行していきたいと思っております。あまり欲張ってもできませんので、着実にやっていきたいと。

厳しい状況は変わらないと思いますが、我々の努力できる範囲内で改善をしていきたいと思っております。

今日はどうもありがとうございました。

4. 閉会挨拶

【林事務部長】 長時間にわたり、ありがとうございました。

以上をもちまして、平成26年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を終了いたします。

どうもありがとうございました。

〔閉会 午後 4時15分〕